

どんじり

久里洋二

株いんなあととりっぶ社

どんじり

一九九二年七月一日発行

著 者 久里洋二

発行者 大坪直行

発行所 株式会社いんなあととりっぷ社

郵便番号一〇六

東京都港区麻布台一―十一―四

電話 (〇三)三五八六―一八二一(代表)

振替 東京四―一三五〇二四

印刷・製本 株式会社萩原印刷所

定 価 一五〇〇円(本体一四五六円)

©Yoji Kuri 1991 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は送料小社負担にてお取り換えいたします。

ISBN4-266-00027-8 C0095 P1500E

どんじり

目次

故郷小学校の巻
5

生家の巻
23

喧嘩の巻
39

殺人の巻
55

カラスの巻
71

別離の巻
89

運・不運の巻
105

三色クレヨンの巻
125

芸者の巻
139

裸体画の巻
157

漫画家志望の巻
175

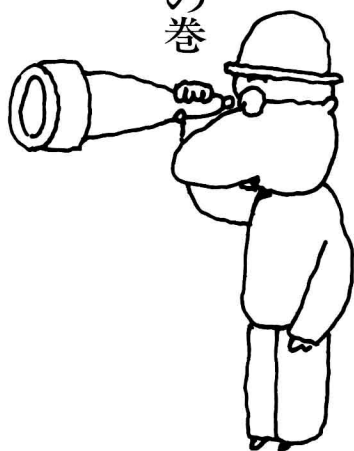
修業の巻
193

漫画賞受賞の巻
211

あとがき
229

装画 久里洋二
装幀 江口一成

故郷小学校の巻



一九八九年六月に五十何年ぶりに故郷の小学校に行きました。立派だと思っていた小学校はすっかり朽ちて、いまにも壊れそうな建物にがっかりしたのです。

（昔の小学校はよかったな）

と思うばかりです。鉄筋の校門はコンクリートがはがれているし、その上にあった丸い電球まで壊れていました。

昔は木造の学校でしたが、終戦後、改造して鉄筋コンクリートになったと聞いていましたが、それも、古くなって、もうボロボロになっているのです。

NHK教育テレビの『授業』という番組に出演のため、小学校に行った折のことです。「ひどい小学校になってしまいましたね」

と校長に話すと、

「いや、じつは、今改装中なんです。来年の春には、新校舎が出来て、いい小学校にな

りますよ」

とっていました。でも、この古ぼけた小学校には、私自身、夢も希望もなくなってしまうのでした。

校門から出ると小さな坂があつて、左側にお寺が一つあります。このお寺には日曜学校があつて、子供ながらに日曜になるとお経をあげに行つたものです。

一回行くと、白い蓮の花びらの形をしたカードがもらえます。それを十枚集めると、赤の花びらが一枚もらえます。十枚十枚で赤から銀色になって最後は金の蓮の花びらになるのですが、仲間の子供たちから菓子と交換して蓮の花びらを手にいれたことを思い出します。

お寺の右側には溝のようなものがあつて、その中に入ってみました、やっと入れるくらいでした。

NHKのプロデューサーの人が、

「久里さん、そんな所に入ってなにしてるんですか」

といったのですが、なんと懐かしいことか、この溝は子供の時とちつとも変わっていないのです。

じつは小学二年の時、学校の帰り、我慢に我慢していたウンチが、この坂で尻から爆

発的に出てきて、ウンチを阻止する力もなくて、

(あらあら)

と思う間もなく出てしまったのです。パンツから半ズボンの外に山吹色の大きなウンチが足にたれてきたので、あわてて溝の中に入って、隠しながら歩いていたのです。

昨夜食べた大豆の煮豆がそっくり出てきたのには驚きでした。

一緒に歩いていたのが、同級生の植田君と酒井君。植田君は、停年になるまでこの小学校の校長をしていましたが、『授業』のVTR撮りの日にも校長室にみえていました。そんなしまりのない私が、教壇に立って、小学六年生に向かって、授業をするというのですから、私はすっかりノイローゼになってしまいましたが、そうでした。

NHKのプロデューサーが、

「久里さんは昆虫が好きだったんですか」

「ええ、昆虫も好きでしたが、未来を空想することも好きな子でした」

「じゃ、『未来を、夢を、飛んで』ってテーマはどうですか？」

「いいじゃないですか」

と曖昧な返事をしたのですが、授業は一時間、休憩なしでおしゃべりをするのですから、なにを話していいものやら、すっかり困ってしまっただけです。小学校の思い出は、

勉強や遊んだことよりも、私にとって、ウンチのイメージしかないのです。

小学五、六年の時、担任だった道端先生の仇名も「アッパ（ウンチの方言）道」でした。なぜ「アッパ道」って仇名がついたのか、その訳は知りませんが、先生の顔を見ているだけで、ウンチがしたくなるからでしょうか。

録画の日に道端先生もみえていましたが、先生は頭のよい生徒だった植田君、酒井君のことをよく覚えていのです。

「ボクのこととはどうして覚えていたんですか、頭が悪かったから？」

何百人もの生徒を教えたはずの先生が、どうして、私を覚えていたのか不思議なのです。多分、なにか強烈な印象があったからかもしれません。

「先生は私に仇名をつけたね」

というと、

「そんなことがあったっけ」

とすつとぼけています。

「熟し柿ですよ」

熟し柿が地面に落ちて、グシャと潰れるさまが私とそっくりだといっていたのです。

ボールのように、地面を跳ねるような人間になれと、私は友だちの前で、毎日のように

厭味^{いざな}をいわれていました。

仇名はその他にも、「ペコ、ラッキョ」とつけられましたが、私は悔しいというよりも、あまり気にしていませんでした。

いつだったか、パリで同級生の酒井君とオペラ通りの免税店^{タックス・フリー・ストア}でばったり会ったことがありました。

「いや」

「いや」

と挨拶も終わらない間に酒井君は部下の男に、

「こいつはね、仇名が熟し柿^{なつとろ}っていつてね、一回落第^{らくだい}してるんだよ、ハハハ」

こんなパリに来てまで、なぜ昔のことを引っぱり出して人を小馬鹿^{こばか}にするのかわかりません。丸紅^{まるべに}に勤めるエリート部長^{チーフ}なのにです。

「明日のゴルフは楽しみだな、ハハハ」

といって出て行ってしまいました。

あいつは子供の頃から意地悪^{いぢあく}だったが、大人になっても、その癖が取れていないようでした。あいつにはウンチを洩らした現場を見られていたので、きつと、そのことも、

話したのにちがいありません。

復讐ふしゅうって言葉を知ったのもその頃です。よく苛いらめられた三人男、酒井に山崎、そして前川まがわのことをいまだに忘れることはありません。

(殺してやりたい)

いつも考えていました。でも、復讐するよりか、自分が偉くなって、叩きのめすしかないとも考えましたが、勉強べんけんぎらいな私には、そんな才能もないことを知っていました。

道端先生が思っているほど、酒井って男はよい人間ではないことを先生は知らないようです。

「惜陰せきいん小学校は明治の初めに出来た名門校でしてね」

と校長がNHKのプロデューサーにっていました。私が子供の頃は、惜陰せきいん小学校といわないで、借金小学校といっていたのを思い出します。

大雪で、小学校が潰れそうになると、町のサイレンが鳴って、

「それ、雪おろしだ」

と大人たちがスコップやバンバ（木で出来たスコップ）を持って飛び出していくのを見えています。

陰気で暗い生徒の多かった私の時代から比べると、今の小学校はガラリと変わってい

ることが感じられます。

校舎に入ると、生徒たちが、

「こんにちは」

とペコンと頭を下げて挨拶するのは驚きです。昔にはない現象だと思いました。

「なかなか立派じゃないの、よその小学校ではないことだよ」

NHKのプロデューサーが感心していましたが、昔のじめじめした暗い印象はありませんでした。

でも、小学校はすっかり変わってしまつて、広い校庭にも、卒業の時植えた桜の木さえありません。校庭のすみにプールがあつて、その周りに人家が密集しているのです。

昔は、校庭の側に雑木林があつて、朝など早く学校に行つてみると、かぶと虫やかみきり虫を捕まえることも出来たし、小さな牧場があつて、雌牛を木にくくり、種牛を後ろから交尾させる様子も、休み時間に見学出来たのです。人参のように赤く、長いペニスを見た時の驚きは、今でもはつきり覚えています。

校門の横には拝礼殿があつて、その中に教育勅語（おきて）などがおさめられていて、天長節、紀元節、明治節には校長が白い手袋をはめて、うやうやしく教育勅語の巻物を出していた風景が目に浮かびます。その場所は今は資料館になっていて、そこに私の絵（二〇〇

号ぐらい）がかけてありますが、なんともおかしい感じですよ。

「栗原君は体の弱い、小さい子でしたね」

と道端先生がいつていましたが、私はそう思いません。校庭に並ぶ時、たしか一番前に並んだこともありましたが、いつからかは後ろに並ぶようになって、背がいくぶん伸びていたようです。

朝礼の時、隣に立っていた山下という子が癩癩てんかんもちで、ひっくり返って、口から泡あわを出して苦しんでいたことがありました。私はとっさに、自分のズックを脱いで、山下君の頭にのせたのです。

先生が飛んできて、

「馬鹿、何をしているんだ！」

と怒鳴って私の頭をゴツンと叩きましたが、なにも悪意あくいでしていたわけではありませんせん。

「癩癩には草鞋わらじを頭にのせると治る」

と聞いていたから、そうしただけでしたが、草鞋ではなくて自分のズックズックをのせたことがいけなかったようです。

小学校へ入学する時、みんな学帽がくぼうをかぶることになったのですが、どの帽子も小さく

て、かぶれなかったことができました。

「0号でも、こいつの頭にあわんよ、お前はバカ頭してるな」

と頭をつつかれ、

「当分、帽子なしや」

と特注して出来あがるまでの一カ月ぐらい、学帽なしで学校に行っていました。

頭でっかちは私だけではありません。大塚という子も頭でっかちで、おでこが福助さまのように大きいのです。おでこで、目がくぼんで目の部分がいつも日陰になっているような子でしたので、暗い印象の子でした。

「大塚君は、元気ですか？」

と植田君に聞いてみると、

「彼は早い時期に亡くなってしまいましたよ」

といっていました。が、彼についてはとても恐ろしい出来事があったのです。

五年生の頃だったと思います。ある授業中、私は鉛筆を削っていると、前の席にいた大塚君が、突然ふり返って、私に話しかけようとしたのです。その瞬間、ナイフが滑って、大塚君の目に当たってしまったのです。運よく瞼の上に当たったらしく失明するほどのことはありませんでした。でも出血して大塚君は大声で泣き叫び、教室は大混乱に